SAPPORO 教区 NEWS
第39号
2022年11月13日
発行：カトリック札幌司教区事務局広報部
〒060-0031 札幌市中央区北１条東６丁目10
Tel.011-241-2785／ホームページ：http://www.csd.or.jp

# 全道カトリックベトナム青年大会

2022年8月13日～14日、全道のベトナム人青年100名以上が集まり、教区主催の青年大会が開かれた。当日は勝谷司教を始め、さいたま教区ベトナム人支援をしているシスターも駆けつけ、同伴者ラム神父（フランシスコ会）と共に盛況に終わった。

2016年11月、北海道に住むベトナム青年信徒が繋がり、助け合い、信仰を守ることを目的に、一人のベトナム人留学生がフェイスブックを利用し、ベトナム語の「札幌カトリック青年会」を立ち上げました。その働きもあって2022年10月現在、日本人を含め500人以上が繋がり、同伴者の協力により、『今日の祈り』も掲載し、信仰生活に役立ててもらってきました。

現在、北海道には約1万人のベトナム人が滞在しています。ベトナムのカトリック信者率は人口比7％ということから、推計700人のベトナム人信者がいることになります。しかし、残念ながら全ての人が教会へ通える環境ではなかったため、彼らは祈りの場を求めて、バラバラに活動しており、中には教会に通うことをあきらめている人も出てきました。フェイスブックの開設により、彼らは個別につながり相談ができるようになってきたのですが、その中でベトナム語のミサの希望も出始めてきました。しかしその実現への道のりは簡単ではありませんでした。

2022年5月初め、札幌市内の公園でベトナム青年信徒が集まり野外ミサが行われた際、同伴者のラム神父は「ベトナム青年会」の主要メンバーを発表し、彼らと話し合い、札幌教区のベトナム青年信徒が一つになるため、一人一人が活かされたチーム作りの準備を始めました。その後開催された全国のベトナム青年信徒リーダーを対象としたオンライン会議には、この中から代表者のウィさんが参加しました。

5月中旬、代表から連絡があり、「札幌教区主催で8月に全道カトリック青年大会をしたい。ベトナム語ミサの司式は同伴してくださっているラム神父にお願いしたい。」という話がありましたが、既に開催までに三カ月ほどしかありません。しかし彼らの思いを教区として実現するために「教区主催」の了解を取り、小教区にも知らせることとなりました。司教や青少年委員会の担当司祭、同伴者ラム神父が所属するフランシスコ会の了解を得ながら、代表者と副代表フーンさんとの打合せを続ける一方で、開催に向け青年たちそれぞれが準備を始めました。

「山の家」の申し込みは全て日本語。参加者一人一人の名前やアレルギーの有無、車で来るための駐車場の希望など、日本人が当たり前にできていることも、言語の壁を乗り越えて取り組んできました。副代表が「山の家」のスタッフと連絡を取りながら一人で対応され、また申し込みフォームを作り、参加費徴収の連絡調整は留学生が担当しました。ミサチームはラム神父と打合せを重ね十字架も作り、IT班は各地区の活動を動画で紹介できるよう準備。ファシリテーターのメンバーはたくさんのプログラムを企画。コロナ禍の開催なので看護班も依頼。

あっという間の三ヶ月。主要メンバーの努力が大きな成果を残し、会場はたくさんの笑顔があふれ、感謝と喜びと次への希望に満たされました。

（情報提供　難民移住移動者委員会）

## カトリック高松司教区 諏訪榮治郎司教引退

２０２２年９月26日に高松教区長の諏訪榮治郎司教の引退願いが受理されたことが発表されました。これにより高松教区は司教空位となりました。

諏訪司教は１９４７年に神戸で生まれ、その後大阪教区で叙階され長きにわたり司牧されました。特に阪神淡路大震災の時には地元の神戸で復興に携わり、その後２０１１年３月に高松教区の司教として任命され、故溝部司教の後任として尽力されました。

今後の司教生活についてはまだ情報はありませんが、今までのお働きに感謝し、健康に留意し、新たな生活を過ごされますようお祈りをお願いします。

また、その後空位の高松教区管理者にはイスマエル・ゴンザレス神父（司教総代理）が任命されましたこともお知らせします。（松村繁彦）

## 故久野勉神父納骨式 師を偲び信徒ら集う

去る9月25日(日)14時より、白石共同墓地（札幌市白石区平和通10丁目北）にて故ヨゼフ久野勉神父の納骨式（司式・勝谷太治司教）が執り行われ、依然として感染者が多い状況ではあったが、師とゆかりのあった市内各小教区から司祭信徒50名程が集まった。

式の中で司教は、久野神父が趣味としていたエレクトーン演奏のエピソードを紹介、集まった信徒らも師との懐かしい思い出を偲び、故人の永遠の安息を祈った。（菊地秀治）

### 札幌教区カリタスジャパン担当・災害対策担当共催勉強会

## 「考えよう 地球家族」

8月20日(土)、札幌教区カトリックセンターにおいて、札幌教区カリタスジャパン担当・札幌教区災害対策担当共催による勉強会「考えよう地球家族」が開催された。

教皇回勅「ラウダート・シ」の目的である地球家族を、災害対応の視点と国際協力の視点から学び、「すべてのいのちを守るため」に私たちは次の活動へどうつなげていくのかを考えようという企画。主な講師に漆原比呂志氏（カトリック中央協議会ERSTスタッフ・一般社団法人ＪＬＭＭ事務局長）を招き、札幌教区災害対策担当・佐久間力師、教区カリタスジャパン担当・松村繁彦師が登壇した。

コロナ禍で様々な教区行事が中止される中での開催ということもあり、参加者は26名（対面参加10名、ＺＯＯＭ参加16名）と少なかったが、遠く広島教区の参加者もあり、教区を越えた勉強会となった。

午前の部（10～12時）は「災害に向けた取り組み」と題して、北海道胆振東部地震における支援活動(佐久間師)と、東日本大震災での支援活動(漆原氏)の紹介、午後の部(13～15時)は「海外支援と国際協力」と題して、国際カリタスとカリタスジャパンの新たなキャンペーン「トゥギャザー・ウィ」(松村師)と、ＪＬＭＭのカンボジア支援活動(漆原氏)の紹介という内容。

参加者からは、「北海道太平洋岸に巨大地震・巨大津波が発生する確率が非常に高いと予想されている今、教会がどのように支援ができるのか、あるいはするべきなのか、考えていく必要がありますね。」「日頃から教会にあったらいいなと感じていることは、①海抜○mの表示、②最寄りの避難所や避難ルートの掲示、③教会への往復で被災した場合の対応など。災害が起こった場合、教会に集う外国籍のかたへの対応なども必要になります。②は、すぐに取り組めるのではないでしょうか。」など、教会ができる災害対応対策についての感想や意見の他、「漆原さんのお話では、戦争自体が悲惨なだけでなく、終わった後も、特定年齢層が欠落するとか、残った地雷や不発弾によって命を落としたり大きな怪我をする人が出るという悲惨さを具体的に突き付けられました。自然と、今のウクライナのことが頭に浮かんできました。」など、世界各地で起こっている命を脅かす脅威に思いを馳せる感想、「『トゥギャザー・ウィ』をはじめ、耳新しい標語が作られます。その標語は今を表す標語でありましょう。標語の理解だけに留まらず、当たり前のことを当たり前に行っていくことを実践していきたいと思います。」など、これから自らどう行動するかなどの感想が寄せられ、今後も継続開催を望む声も多く聞かれた。（菊地秀治）

## 旭川地区カトリック大会
### ～私をお使いください～

「平和」を大きなテーマとして掲げた66回目の旭川地区カトリック大会は、日本カトリック平和旬間のスタートである8月6日からスタートし、9月11日の勝谷司教の司式によるミサをもって閉幕しました。

昨年度に引き続き、今大会もコロナ禍での開催となったため、残念ながら地区内の信徒が一堂に会することは叶いませんでしたが、一致して取り組めることはないかと考えた結果、ロシアのウクライナ侵攻を始め、身の回りの平和が脅かされている現在、私たち一人ひとりが平和の道具として何ができるのかを考えるきっかけとなるよう、期間中同じ時間に聖フランシスコの「平和を求める祈り」を唱えることとしました。

また、大会のテーマは、平和の道具として働きたいとの思いを込めて、マザーテレサの祈りにある「わたしをお使いください」としました。

司教ミサは、会場となった大町教会の信徒と共同祈願を行う各教会の代表者のみの参加となりましたが、地区内の信徒に向けてライブ配信を行いました。昨年度は司教ミサでの聖体拝領に併せて各教会でも聖体拝領を行うことができましたが、特例的な措置とのことで、残念ながら今回は見送ることとなりました。

大会を終え、地区内で一つのことをやり遂げた充実感と、日々の祈りを通して身の回りの出来事に対して無関心であってはいけないということを改めて感じているところです。

次年度の開催については今後検討することになりますが、ウィズコロナの時代を過ごす私たちが、実りある時間を過ごせるよう、知恵を出し合っていきたいと考えております。

（第66回旭川地区カトリック大会
事務局長・梶山朋宏・大町教会）

## 札幌働く人の家
### 30周年＋1お祝い会

札幌働く人の家は、1991年に建設されました。去年、30周年を迎えましたが、コロナ感染予防のため、今年9月24日(土)に30周年＋1としてお祝い会を開催、70名近くの方々が参加されました。

第一部は、勝谷司教と6名の司祭によるミサが行われ、勝谷司教は説教で、「青年の声や生きている現場に耳を傾けて、信者でない人も含めて分かち合いを通して現実をしっかり受け止めていくことが大切です。」と語られました。

第二部は勝谷司教と賛助会代表の上杉神父のお祝いと感謝のメッセージ、ペラール神父から建設当時の話がありました。その後、札幌と広島JOCの青年達の生活文発表、広島・高砂・大阪・京都・東京・札幌各JOCの青年と協力者達による地域紹介を兼ねた出し物が続き、発表に涙し、寸劇に感動し、ゲームに笑いと、青年の発想の素晴らしさに感心しました。今年50周年を迎えた働く人の家第一号の高砂働く人の家運営委員、そして元JOCOBからのお祝いメッセージ、最後に全国協力者そして札幌JOCの協力者であるレネ神父の挨拶で終了しました。

30周年にあたり、今年働く人の家は改修工事が行われ、1階はより使いやすくなり、2階には明るいJOCの部屋、3階には洋室が出来ました。これからも多くの人に使っていただければと思います。

いつも青年たちを温かく見守り協力してくださる皆様に心から感謝いたします。どうぞこれからもJOCと働く人の家を支えてくださいますようお願い致します。青年（未信者）の参加もお待ちしております。

（札幌働く人の家
事務担当・長澤幸子）

当日のミサは全国JOCホームページからリンクのフェイスブックにて閲覧が可能。是非、ご覧ください。

■全国JOC
http://www.ycw.jp
■札幌働く人の家
sapporojoc@ycw.jp

## 「中高生の集いin千歳」
### 全道カトリック高校生会主催

7月18日（海の日）に、千歳教会で中高生対象の、デイ・キャンプが開催されました。いつものキャンプとは違い、日帰りの日程で千歳教会に集まり、みんなで祈り、野外へ出かけ、バーベキューをしました。

札幌近隣の5人の中高生と、お手伝いの青年にも来てもらい、一緒に火をおこす準備をしたり、千歳市にある新たに世界遺産として認定された「キウス周提墓群」も見学。遺跡の中では夏のセミがそこかしこで脱皮している珍しい光景も見られ、子どもたちは、命の神秘を垣間見て、興奮している様子でした。

コロナ禍で、感染対策をしながらの会でしたが、参加者は久しぶりに会う仲間との再会を喜び、ともに心を合わせて祈る時間を持つことで、改めて友と活動できる喜びを身体で感じながら楽しんでいるようでした。

（青少年担当司祭・佐久間力）

# 「神のみで足る」

カトリック伊達・室蘭教会
主任司祭
蓑　島　克　哉

司祭4年目の私は、現在、カトリック室蘭教会と伊達教会を担当しながら、毎日、伊達カルメル会女子修道院でミサをささげています。表題の「神のみで足る」はイエスのテレジア（アヴィラ）の言葉ですが、神のみを求めれば神がすべてを導き与えてくださるので何も恐れることはないのです。これからも感謝のうちに聖務を果たしていきたいと思います。皆さん、どうぞよろしくおねがいします。

担当する「教区神学生養成担当」と「終身助祭委員会」では、真の養成者はイエス・キリストであるということを学んでいます。何もない私だからこそ主が働かれるということを日々実感しています。「正義と平和協議会」では、諸兄姉の皆様の姿から社会とのつながりのなかで教会の使命を果たしていくことの大切さを学んでいます。「聖書委員会」では、阿部包先生（藤大学）と市川栄作先生（海星学院高等学校）、松村繁彦神父（教区事務局長）がチームに参加くださり、現在準備中ですが、希望の光で我らを照らし導かれる〝み言葉〟を多くの人にお届けしたいと思います。

「エキュメニカル委員会」では、森田健児神父にご協力いただき朝祷会に参加しています。キリストを信じる各教派の人たちが垣根を越えて集い親睦を深めています。

また、教区外で担当している「みなずき会」では、世界的なコロナウィルスの流行と異常気象の頻発、ウクライナ紛争の影響で利用者が倍増しています。ボランティアの皆さんはいつも寒いところに立ってホームレスの皆さんに〝命の糧〟を配っておられますが、あの寒くて温かい配食場にはイエス様がたくさん来られます。「札幌オリーブの会」では、家庭内暴力、事故や事件、思わぬ災害や病気など、それぞれの生きづらさを抱えた仲間たちが集まり互いに支えあい励ましあっておられますが、担当司祭の私はこの集まりを通じて、各地を歩きまわり人々を癒されたイエスのまなざしと、そのまなざしに信頼する参加者の皆さんの力強い応答にいつも勇気と元気をいただいています。チャプレンを務める「苫小牧聖母幼稚園」でも、先生と子供たちからたくさんの笑顔と元気をいただいています。

室蘭市も伊達市も、ともに豊かな自然が多く、どこにいてもすぐに神の輝かしい栄光を見つけることができます。是非一度、遊びにいらしてください。

## 新任司祭紹介

アンセルモ 李動珍
（イ・ドンジン）
韓国/馬山教区司祭

1981年7月15日生まれ、41歳。2009年12月29日司祭叙階、その後6か所の小教区で司牧し、青少年司牧、福音宣教ディレクターなどを歴任し、2022年5月に来道。馬山教区との期限付き契約により、札幌教区で宣教司牧にあたります。コロナの関係で1年以上来道が遅れましたが、無事に函館地区の司牧担当者として着任しました。函館地区には李神父がもう一人おられることから、地区長の祐川神父からは「『アンセルモ神父』と呼ぶことにします」と司祭団に紹介されました。

聖書週間　11月20日～27日
テーマ「あなたの隣人とはだれか」
（ルカ10・25-37）

カトリック札幌司教区
ハラスメント対応デスク
080-2879-3168
火曜～金曜
12:00～16:00
祝日夏季冬季休業日除く
秘密は厳守いたします
こども・女性・男性、
誰でも相談できます
Eメール
sapporo.harassment
desk@gmail.com

札幌市内に2ヶ所　やすらぎの墓所

クリプト札幌
カトリック札幌司教区納骨堂
札幌教区カトリックセンター地下
家族壇568区画・合葬壇730
天候問わずいつでも墓参可能

白石共同墓
札幌市白石区平和通10丁目北5-1
札幌市白石本通墓地
札幌教区の司祭・修道者・信徒
ならびにその家族を対象とした共
同墓(合葬)　2023年増設予定

お問い合わせ
〒060-0031　札幌市中央区北一条東6丁目10　札幌司教区本部事務局
電話 ■白石共同墓：011-241-2785　■クリプト札幌：011-221-4244
いずれも平日9:00～17:00　（土曜日曜祝日及び夏季冬季休業を除く）

# 新たな典礼への旅 ④

2022年待降節からミサ式次第と奉献文（ミサの中心的祈り）が変わります。
最終回の今回は教区典礼委員 札幌地区担当 佐藤謙一神父が担当します。

４回目の典礼の旅では、言葉が変わったところを中心に解説したいと思います。

まず開祭の十字架のしるしの後のあいさつが変わります。「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに」と司祭が呼びかけた後、会衆は「またあなたとともに」と応えます。この叙階を受けた司式者とのあいさつの言葉は違和感を覚えるかもしれません。普段、司教や司祭のことを「あなた」と呼ぶことがないからです。◇◇司教、○○神父と呼ぶのが普通です。しかしここは割り切って典礼、特にミサの中では「あなた」と呼ぶことに慣れてください。この変更は福音朗読の前、叙唱の前、平和のあいさつ、派遣の祝福の時のあいさつも同様です。

次に回心の祈りが少しだけ変わります。「兄弟の皆さん」と唱えていたところが「兄弟姉妹の皆さん」と変わります。１９７０年代のミサ典礼書を翻訳するにあたり、初めは「兄弟」という言葉で「兄弟姉妹」を表すということで「兄弟」にしたと聞いたことがあります。確かに「わたしの兄弟は妹と弟です」と言いますし、「わたしの兄弟は姉と妹です」とも言います。ところで回心の祈りの初めに「皆さん」と呼び掛けていますがこれは式文の原文を見てみると「兄弟姉妹の皆さん（Fratres、羅）」という呼びかけになっています。ラテン語の兄弟（frater）は単数形では兄弟ですが、複数形（fratres）では兄弟姉妹という意味になり、参列している皆さんを指しています。回心の祈りの英語版は「brothers and sisters」となっていて意味を重視して翻訳していることが分かります。日本語版も「兄弟姉妹の皆さん」として意味を重視して変えたわけです。

次はいつくしみの賛歌です。「あわれみの賛歌」をいつくしみという言葉に変えています。文語から口語にするにあたり「あわれみ」から「いつくしみ」に変えたのは、いつくしみに満ちた主をほめたたえる意味が元々強いからです。私見ですが「あわれみを」というのは自分を憐れんでくださいというように自分に向かっているように感じますが、「いつくしみを」であれば神からのいつくしみを注いでくださいというように、神からの恵みに中心が行っているように感じます。栄光の賛歌、感謝の賛歌も口語に変わりましたのでご確認ください。

第一朗読と第二朗読の朗読の最後に朗読者が「神のみことば」と唱えて会衆が「神に感謝」と応えます。いままでは沈黙のまま終わるか侍者がいれば侍者が「神に感謝」と唱えて終わりました。教会によっては朗読者が「神に感謝」と唱えたりそれに合わせて会衆も「神に感謝」と応えていたりしました。そのような混乱や不一致が見られたため規範版に従って朗読者が「神のみことば」会衆が「神に感謝」と唱えるよう統一しました。福音朗読では司祭（あるいは助祭）が朗読後に「キリストに賛美」と唱えていましたが本来この言葉は会衆の応答の言葉です。これを「主のみことば（Verbum Domini）」と言うようにしました。会衆は今まで通り「キリストに賛美」で変わりません。

奉納祈願の前に司祭が祈りに招きますが、今までは沈黙の祈りとしていました。新しい式文では会衆が応答する言葉が加えられました。「神の栄光と賛美のため、またわたしたちと全教会のために、あなたの手を通しておささげするいけにえを、神が受け入れてくださいますように。」この言葉は唱えることができるとなっていたため、教会によっては唱えていたり沈黙の祈りであったり不統一が生じていました。それを必ず唱えることとしたのです。

奉献文の初めに司祭と会衆の応答があります。司祭「主はみなさんとともに」会衆「またあなたとともに」司祭「心をこめて」会衆「神を仰ぎ」司祭「賛美と感謝をささげましょう」会衆「それはとうとうい大切な務めです」。以前は司祭が「心をこめて神を仰ぎ」会衆が「賛美と感謝をささげましょう」と唱えて終わっていました。最初のあいさつは大丈夫でしょうが、その後の応唱が１回増え、順番が変わるところがありますので気を付けて唱えましょう。

「信仰の神秘」と司祭が唱えた後、会衆が答える言葉が変わります。３つありますのでミサの前に司祭か典礼係でどの言葉を唱えるのかを決めて皆さんにお知らせするようにしておきましょう。「主よ、あなたの死を告げ知らせ、復活をほめたたえます。再び来られるときまで。」「主よ、このパンを食べ、この杯を飲むたびに、あなたの死を告げ知らせます。再び来られるときまで。」「十字架と復活によってわたしたちを解放された世の救い主、わたしたちをお救いください。」覚える必要はありませんが手元に唱える言葉を用意しておきましょう。

平和の賛歌の言葉が変わります。「世の罪を取り除く神の小羊、いつくしみをわたしたちに。」今まで先唱と会衆の応答として唱えていましたが、新しい式次第では先唱と会衆の区別なく全員ですべての言葉を唱えます。最後に「世の罪を取り除く神の小羊、平和をわたしたちに」で締めくくります。

拝領前の信仰告白も変わります。司祭「世の罪を取り除く神の小羊。神の小羊の食卓に招かれた人は幸い」会衆「主よ、わたしはあなたをお迎えするにふさわしい者ではありません。おことばをいただくだけで救われます。」今まで唱えていた言葉も唱えられますが新しい言葉を覚えるためにこちらの言葉で応唱するようにしましょう。他の教会に行ったときに覚えてないので唱えられないということのないようにしましょう。

以上、会衆のことばの変わるところを解説しました。不明な点があれば、司祭・助祭・典礼に詳しい方に尋ねてください。「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉（典礼憲章SC10）」ですから、新しいミサの言葉に慣れてふさわしい心でミサに与ることができるように歩んでいきましょう。

（終）

## 北海道カトリック幼保連盟 園長教職員研修大会（全道大会）

２０２０年に始まったコロナ禍の影響で、今年度の第55回全道大会も昨年に引き続きオンライン開催となり、７月27日午後、全道の幼稚園・こども園・保育園より、３７０名余りの教職員が参加しました。

勝谷司教の挨拶に続き、保育者の祈りを唱え、例年通り永年勤続者表彰を行いました。表彰は、道内にあるカトリック園で20年または30年勤務された方を対象とし、今回は30年勤続者が２名、20年が５名、計７名の教員が表彰されました。長きにわたり、道内カトリック園での保育幼児教育に貢献して戴いたことに、心より感謝申し上げます。また今年度、新たに就任した園長の紹介も行われ、今回は５名の新園長をお迎えすることとなりました。

研修会は、二つの講演と事例報告（花川マリア認定こども園と大麻藤認定こども園）という内容で進められました。

講演Ⅰは、幸田和生司教より、「カトリック園のこころ」という題で、イエスの生き方と教えを聖書の箇所を引用して話され、それを基に、カトリック園での保育・幼児教育が注力すべき点について言及されました。カトリックの教えと、園における実践が結びつく講話でした。

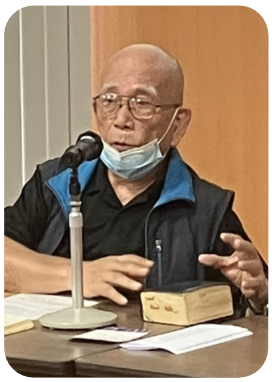
講演Ⅱは、青山学院大学の湯川秀樹教授より、「今後の教育・保育が目ざす方向性について」をお話し戴きました。以前文科省で視学官という指導的立場にいらした方なので、各種法令の根拠や将来に向けての国の政策などにも触れて下さいましたが、参加者の多くが現場で保育に携わる一般教職員だったことから、内容的にかなり難しかったと感じます。

事例報告の２園は、それぞれ素敵なＤＶＤを使って各園の紹介をされました。他園にとっても、大変参考になると思います。カトリック園の繋がりを感じる研修会でした。（品田典子）

## 平和旬間・平和講演会 本田哲郎神父を招いて

今年の平和旬間、２０１２年10月に続き２度目となる本田哲郎神父の講演会「『お大切に』の心と行動こそが世界の平和をもたらす」が開催された。猛暑の大阪から日帰りで来札された本田神父のもとに、来場83名＋オンライン45名という大勢の参加があった。

神父のお話には冒頭から引き込まれた。教会の中でよくあること、起こりがちなことについて、「どうなの？」「それは余分なことではないの？」と問いかけられ、「聖書の教えはものすごく単純明快だよ」と説かれる。そして典礼聖歌のニュアンス間違いの指摘に至るまで、驚いてしまうような内容が次から次へと続いたのだが、敬虔なカトリックの家庭で育ちバチカンで聖書を研究し新共同訳聖書の編集に携わられ、そして長年に渡り労働者の街釜ヶ崎で南京虫と暮らす本田神父だからこその重い言葉であった。余分な思い入れを捨てて聖書に向き合いなさい、そして社会へ出て行き、社会の中で「本当の洗礼」「ほんまもんの福音」を知りなさい。ご自身の人生を通して教え伝えてくださっていることは、こんなことなのではないか。そして私たちが実現しなければならないのは、違う神を持つ人、神を持たない人、と共に暮らす社会であって、そのために憲法９条よりも前に「お互いを大切にしあいなさい＝殺すな」があり、それが力になることを信じたいと思った。



この講演会はユーチューブで公開されている（教区ＨＰから）。

（佐藤裕子・山鼻教会／札幌教区正義と平和協議会共同代表）

## ともに生きる 日本語支援とは…

藤女子大学日本語教員養成課程が開設されてから20周年を迎えるにあたり、公開講演会が11月５日、藤女子大学北16条キャンパスで行われ、スピーカーの一人としてお話をさせていただくことになった。テーマは、「北海道で求められる日本語支援・外国人支援とは」である。

カトリックセンターでは現在、週３回、日本語教室を行っているが、12年ほど前からこの養成課程で学んでいる学生たちに実習の場を提供している。というか、日本語教室はボランティアで行っているので、学生たちの協力で成り立っているというべきかもしれない。また、学習者の日本語力と、教えたい学生たちの力は様々なのだが、上手くマッチングして教室運営をしてくださっているのは、内田千賀子さんである。彼女無しでも日本語教室は成り立たないだろう。

私もこれまで数名の学生たちに出会ったが、たどたどしく教え始めた学生が、「先生」と呼ばれる中で、少しずつ成長するという姿を見せていただき、実習の場で多くを学び、卒業後に本当に日本語教師の道を選んだということを聞くのは、嬉しい。

日本語支援の現場は、時代と共に変わっている。私が学んでいた頃は、海外へ教えに行くことが主流であった。「うぇるかむはうす」があった頃は、小さな子どもを連れてくる学習者もいたので、ベビーシッターをお願いしていたこともあった。子どもの日本語教育にも関わり、学生たちには子どもたちの学習補助もお願いしていた。学生たちは、子どもたちにとっては優しいお姉さんだった。そして、今もいろいろな背景を持つ学習者が来ている。直近では介護現場で働く「特定技能」という在留資格を持つ人が、申し送りの日誌を上手く書けるようになりたいと学びに来ている。日本語支援を通して、日本社会で生きている外国人に出会い、そこにある課題を知る。学生たちには日本語だけではなく、社会のことも知って欲しいと思っている。

（札幌教区難民移住移動者委員会・西　千津）

※前号副題の「ウクイナ」は「ウクライナ」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

# アイヌ民族との共生を目指して

カトリック小樽教会　新海雅典神父

教皇回勅『ラウダート・シ』は地球を家のように愛し配慮するよう呼び掛けている。アイヌの信仰・精神には、神と被造物と私が密接に繋がっていることから、4回に分けてアイヌを学んでみたい。

## 第一回　アイヌモシリへの侵略の始まりと抵抗運動

「アイヌ」という言葉は「人間」を意味するが、「アイヌ・ネノ・アン・アイヌ」（より人間らしい生き方をする人間）という深い響きをもつ。アイヌ民族は、本州東北部から北海道、サハリン、千島列島に及ぶ広い範囲で固有の言語・文化・歴史をもつ先住民族である。

さて「アイヌモシリ」（人間の静かなる大地）である蝦夷地（北海道）に、和人が入り込んできたのは12～13世紀頃である。当初は平等な交易が行われていたので、アイヌの人々は「シサム（隣人）」と呼んでいた。だが次第に抑圧的で不平等な搾取が始まると、「シャモ」と呼ぶようになる。やがて和人への抵抗運動が起こる。1666年6月、静内町真歌の丘にチャシ（砦）を構え、松前藩に対する戦い「シャクシャイン蜂起」が起こる。更に120年後の1789年には「クナシリ・メナシの蜂起」（〇〇の乱という言葉は権力側の用語なので用いない）が起こるが、いずれも劣勢だった和人の側からの和議の場で「だまし討ち」によりアイヌの指導者たちが謀殺されたことにより鎮圧されてゆく。

さて18世紀の中頃から蝦夷地交易に目をつけた近江商人たちが北前船などで進出してくる。商人たちは本州から米・衣類・金属類などを仕入れて、松前で鮭やニシン・毛皮・山丹交易品などと交換し、京都大阪方面へと運んだ。このような交易が盛んになると、松前藩は「商場（あきないば）知行制」という商業流通制度を確立してゆく。しかしアイヌ民族にとっては収奪の対象とされたのみならず、更に厳しい労働使役が課せられていった。

やがてアイヌモシリへの商業資本の組織的な侵入という状況が進んだ事により、松前藩は商場知行制から「場所請負制」への転換をはかってゆく。この制度は商場で松前藩士の知行（給料のようなもの）として与えられていた交易権を、近江商人に委託して運上金を納めさせるものである。この場所請負制はアイヌ民族を生産者・交易者としての立場から、漁業労働者へと転化・従属させ、アイヌ社会を構造的に破壊していった。更にシャモがもちこんだ天然痘・はしか・梅毒などが、免疫性のなかったアイヌ社会に蔓延し、アイヌ人口の激減に拍車をかけていったのである。一方幕末には対ロシアの進出を抑えるため、ロシア正教などのキリスト教も、蝦夷キリシタン弾圧と併せて禁止した。

静内町真歌の丘にあった
シャクシャイン像

# 訃報

## ◆殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会

Sr.M.パウエルタ
千田　和子

8月1日午前11時頃神様のみもとに召されました。享年86歳。

【略歴】
1935年8月28日生まれ
1954年12月8日受洗
1975年5月30日入会
1985年8月11日終生誓願

Sr.M.オディリア
下郡山 和子

8月4日早朝、老衰のため神様のみもとに召されました。享年91歳。

【略歴】
1931年1月12日生まれ
1950年11月11日受洗
1954年9月8日入会
1963年8月12日終生誓願
2016年11月23日誓願金祝
2016年11月23日ダイヤモンド祝

## ◆マリアの宣教者フランシスコ修道会

Sr.M.フランシスカ
風間 まさ子

8月27日、入院先の天使病院にて神様のみもとに召されました。享年90歳。

【略歴】
1931年11月12日生まれ
1955年12月15日入会
1960年12月15日終生誓願

Sr.M.ヨゼフィナ
段坂　廣子

9月8日午前11時19分、入院先の北海道消化器科病院にて神様のみもとに召されました。享年81歳。

【略歴】
1941年5月1日生まれ
1970年3月18日入会
1978年3月19日終生誓願

北国のシスターズ

# 日々主キリストの心を心として

## イエズスの聖テレジア修道院（伊達カルメル会修道院）

私たちの小さな修道院は、当時の札幌教区長富澤司教様のお招きをいただいて東京から分かれ、1962年11月に北海道の地に日本で第五番目のカルメルとして創立されることとなり、今年11月14日に六十周年を迎えます。

「札幌カルメル会イエズスの聖テレジア修道院」として月形(中小屋)に誕生し、貧しさの中でトラピスト・トラピスチヌをはじめ道内の他の修道会、司教様、司祭方、信徒の皆様の愛にあふれる寛大な援助をいただいて最初の歩みを始めました。新田マリア院の皆様の暖かいお心、そしてちょうどその頃すぐ隣に開設された「雪の聖母園」園長の木内神父様が、父のような心で雪かきなども助けて下さいましたが、豪雪地帯の冬の厳しさ、除雪の労働に19年の月日が明け暮れる中で、やがて姉妹達の健康が害なわれ、建物の破損も多くなってきました。この現状を見て心を痛めたゲレオン神父様(フランシスコ会)の精力的な働きと札幌教区、多くの方々の援助によって、1981年の秋、もっと気候のよい伊達市に移転することができました。ここ伊達でも市と伊達教会、近隣の方々の温かいお心づかいをいただき心から感謝しております。

私たちの生活は、毎日のごミサから力をいただいて（ごミサのために来て下さる神父様方にどれほど感謝していることでしょう）、日に七回の「教会の祈り」（聖務日課)を、「教会の娘」として教会のため、世界のため、人々の霊魂の救いのために必要な恵みを願って心をこめて捧げ、朝の起床から夜の就寝まで、毎日決まった時間割りのもとに繰り返す私たちのこの生活全体が、一つの祈り、神との親しい語らい、何一つ残さずに捧げ尽くす愛の奉献でありたいと願っています。すべてを通して「祈ること、生きること、愛すること」、これこそまさしく私たちの召命です。生計の仕事として、創立当初、クッキー作りなどいろいろの試みをしている時に、ひとりの神父様が「お菓子は愛や喜びを表すために使うものだから」とおっしゃったので、クッキー作りをすることに致しました。今はこの仕事を中心に、他に畑で野菜を少し作るなどして、近くの農家の方々に助けられながら、神のみ手の中で、母聖テレジアの望まれる「互いに仲の良い友であり、互いに助け合い、互いに愛し合う共同体づくり、この隠れた囲いの中の生活を日々、み旨に忠実に従って生きることによって、多くの恵みを勝ち得ることが出来る者となる」ことを願いながら、喜びのうちに毎日を送っております。

創立以来いつも私たちを助けて下さる司教様方、神父様方、男子、女子修道会の皆様、伊達教会の皆様、そして、多くの方々にこの紙面をお借りして心から感謝申し上げます。

マリア祭の行列ルルドの前で

推薦図書

## 「燐光」　発行 天使印刷所

天使カトリックカレンダーは多くの方に親しまれ、発行されてから90年になりました。この度、過去の写真を集め写真集を発行しました。懐かしい写真を通して日本の教会の歴史をも感じることができるでしょう。

このカレンダーを発行している天使印刷所は、マリアの宣教者フランシスコ修道会のシスターたちが1972年に設立。フランスから来たシスターたちはアルファベット26文字の印刷経験はありましたが、日本ではカタカナ、ひらがな、漢字など多様な文字と格闘することになります。多くの困難を乗り越えて技術を磨き、メディアを通した宣教に貢献してゆきました。天使カトリックカレンダーはそうしたシスターたちの祈りと献身によって生まれたものです。その後、天使印刷所はシスターたちの手を離れ、現在はフランシスコ会を株主とする有限会社として独立して活動しております。（山谷篤史）

## 編集後語（あとかたり）

去る10月2日、函館山の山腹にあるカトリック墓地への合同墓参がありました。晴天にも恵まれ、ロシア人墓地や外国人墓地とも隣接した墓所からは、眼下に函館湾を行きかう連絡船や貨物船も望まれ、清々しい雰囲気の中、参加者一同心を一つにして追悼の祈りをささげることができました。

そんな折、知り合いの墓石が、墓じまいによって撤去されていましたという話を聞きました。

団塊の世代が80～90歳を迎え、終活の話題が会話の端に上ることが多くなりました。女性の信者さんの中からは、長男のお嫁さん故に、仏式の法事にご苦労されているとの話も聞きます。

日本においては圧倒的少数派のキリスト者としての最期のむかえ方、おくり方。永遠への旅路をしっかりとサポートしていきたいと思いました。

（桶田達也）